

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本

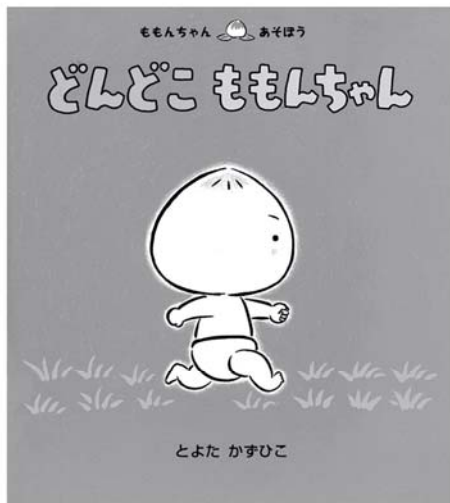
## 息子が夢中に

なって

いたわけは……？

磯崎園子

いそぎき そのこ／絵本情報サイト「絵本ナビ」編集長。大手書店の絵本担当という前職の経験と、自身の子育て経験を活かし、「子育て」「絵本」をキーワードとした情報を発信している。



とよたかずひこ／さく・え

「子どもが生まれてから、好きになった絵本」と言って、真っ先に思い浮かぶのが「ももんちゃん あそぼう」シリーズ。息子があかちゃんころから繰り返し読んできたのだけれど、まったく飽きることはないどころか、今でも絵本を開くたびに顔が緩んでしまいます。でも、一体どうしてそんなに惹かれてしまうのでしょうか。

例えば、「ももんちゃんがつちの子に似ている」。

これはどの家庭でも共通する感想のようです。何をしても我が子に見える、頑張っていると泣けてくる……。もはや他人事ではありません。

次に、「読んでいて気持ちがいい」。口に出して読みたくなる語感とリズム。これは重要なポイントです。特に小さな子は、気に入れば何回だって、何十回だって、平気でリクエストしてきますからね。ところが「ももんちゃん」シリーズは、ちっとも苦になりません。調子が上がってくれば、それを察してか、子どもたちのノリもどんどん良くなっていきます。子どもたちの嬉しそうな様子を見ているのは、もちろんたまらなく幸せな瞬間です。

さらに、「ダイナミックなストーリー展開がクセになる」。ここであの子が登場して、次にちょっとしたハプニングが起きて……。どのお話も奇想天外でいながら、最後にはちゃんと甘えられる場面が待っています。我が家では、「どんどこももんちゃん」のくまさんが倒れるシーンで、必ず一緒にどーんと床に転がることになっていましたっけ。

と、そんな風に思い返していると、既に中学生に

なった息子が隣にいたので、渡してみます。すると息子は、ペラペラとめくりながらしみじみ言います。「なつかしいー、この大きいくまー」

「あ、このサボテンも、きんぎょもー」

そのとき、初めて気づいたので。あれ、息子はこの絵本を「ももんちゃん視点」で楽しんでたんじゃないか？と。ももんちゃんのことよりも、出会うキャラクターや出来事の方をよく覚えているようなのです。子どもにとって、それは面白いはずです。だって、どんどこ歩いていった先に大きなくまさんが立ちはだかっていて、おすもうでどーんと倒すのです。お風呂に入っていると、ヘンテコなきんぎょさんやサボテンさんが入ってくるのです。大きなうしさんをおさんぼさせるのです。ももんちゃんが大きな頭をどちってぶつければ、痛かったでしょうし、えんえんと泣いている子を見れば、自然となでなでしてあげていたのでしょ。

シリーズは全部で十八冊。どの絵本の中で楽しんできたのか、子どもによって思い出や記憶も違うのでしょう。かくれんぼをしていた子もいれば、シリーズに登場しているキャラクター全員と仲良しの子もいるでしょう。十年越してまた新たな魅力を見つけてしまうとは……。ももんちゃん恐るべし。

今までどちらかと言つと、読んであげる大人たちの間で絶大な人気を誇っていると思いついていた私ですが、どうやら子どもたちも負けず劣らず夢中になっていたようです。ああ、またシリーズ全部を読み直してみたくなくなってきました。